

J.シュトラウスII：オペレッタ『こうもり』序曲

ヨハン・シュトラウスII世(1825-99)はウィンナ・ワルツとウィンナ・ポルカに黄金時代をもたらした作曲家だった。彼は父ヨハン・シュトラウスI世やヨーゼフ・ランナーによって礎が作られたウィンナ・ワルツおよびポルカのスタイルをさらに発展させて洗練されたものとし、このジャンルの黄金時代を築き上げる。そしてさらにオペレッタ(喜歌劇)の中にこうしたワルツやポルカを取り込んで、いわゆるウィンナ・オペレッタの新しい時代を拓くこととなる。

彼のオペレッタの中でも最もポピュラーなのが1874年に初演された『こうもり』である。物語は、富裕な紳士アイゼンシュタインに恥をかかされた友人ファルケが舞踏会を企画し、機知に富んだたくらみを仕掛けてアイゼンシュタインに仕返しするというもの。ウィーン情緒満載のオペレッタで、甘美かつ優美で時に哀感をも漂わせた流麗なメロディ、生き生きしたリズム、ウィーン風のウィットといったシュトラウスの美質が物語の展開のうちに見事に溶け込んだ傑作となっている。

序曲もそうしたこのオペレッタの内容を凝縮した楽しい曲で、本編の中のいくつかの旋律に基づいて巧みに纏め上げられている。

バーンスタイン(メイソン編曲)：『ウエスト・サイド・ストーリー』セレクション

レナード・バーンスタイン(1918-90)はアメリカの生んだ20世紀を代表する大指揮者だが、作曲家、ピアニストとしても活躍した多才な人であった。作曲家としては、交響曲などのシリアスな分野からミュージカルや映画の音楽に至るまで様々なジャンルを手掛けている。特にミュージカルの分野では、従来の表現パターンや語法を超えた多様な手法を盛り込んで、このジャンルに新しい地平を拓いた。

その初期の彼のミュージカルの代表作が『ウエスト・サイド・ストーリー』だ。構想は振付師ジェームズ・ロビンスから提案があった1949年に遡るが、本格的な着手は1955年となった。白人のジェット団とプエルトリコ移民のシャーク団という2組の不良グループによる人種対立を背景としたトニーとマリアの悲恋をテーマとした物語で、台本をアーサー・ロレンツ、作詞を若いスティーヴン・ソンドアムが担当し、1957年(バーンスタインがニューヨーク・フィルの常任指揮者に就任した年)に完成、世界初演は1957年8月19日にワシントンでなされ、続いて9月26日からニューヨークのブロードウェイで上演されて記録的なロングランとなった。

作品としては、悲劇的なテーマを扱いつつ、近代的和声、フーガなどの技法、アリアや重唱の様式、ジャズその他民衆音楽の要素など、多種多様な手法を取り入れている点で、従来のミュージカルを大きく超えている。まさにミュージカル史上に革新をもたらした傑作である。

このミュージカルのナンバーをオーケストラの演奏会用に抜粋・編曲した組曲としてはバーンスタイン自身が編んだ『シンフォニック・ダンス』が知られるが、本日取り上げられるのはジャック・メイソンの編曲による『セレクション』。「アイ・フィール・プリティ」、「マリア」、「サムシング・カミング」、「トゥナイト」、「ワン・ハンド、ワン・ハート」、「クール」、「アメリカ」といったこのミュージカルの聴きどころをメドレーとしてつなげたもので、作曲家自身の『シンフォニック・ダンス』では省かれたおなじみのナンバーが多く含まれた編曲となっている。

ヴィエニャフスキ：グノーの『ファウスト』による華麗なる幻想曲 Op.20

ヘンリク・ヴィエニャフスキ(1835-80)はポーランド生まれのヴァイオリニストで、ヨーロッパやロシアでヴィルトゥオーゾとして活躍する一方、作曲家としても名技的なヴァイオリン曲を数多く残した。

本日演奏される作品は、フランスの作曲家シャルル・グノーのオペラの代表作『ファウスト』の中のいくつかの楽想をもとに、ヴァイオリンの技巧を発揮すべく作り上げた名技的な作品である。ヴィルトゥオーゾがもてはやされた19世紀には、こうした当時の人気オペラの旋律を主題として難しい演奏技巧を聴かせるように作り上げた器楽曲が非常に好まれ、多くの華やかな作品が生み出された。ヴィエニャフスキのこの作品も、グノーの『ファウスト』の中の楽想を素材に、ヴァイオリンの難技巧と表現力を駆使した華麗な作品に仕立て上げられている。作曲は1865年(1868年説もある)で、作品はデンマーク王に捧げられた。ピアノ伴奏の形でよく演奏されるが、もともとは本日のような管弦楽伴奏による協奏作品として書かれている。

曲はオペラ第1幕の幕開けの楽想に基づく管弦楽の序奏に始まり、以後オペラ中のアリアや重唱の旋律をはじめとする様々な場面の楽想が結び付けられ、変奏を施されながら、ヴァイオリンの様々な技巧や叙情的なカウンタービレを巧みに配した変化に富む発展が繰り広げられていく。

バーンスタイン：『キャンディード』序曲

バーンスタインの劇作品のひとつである『キャンディード』はミュージカルとして扱われることが多いが、本来コミック・オペレッタとして書かれ1956年10月にボストンで初演された。その後12月にブロードウェイで上演されるようになったことでミュージカルとして知られるようになったが、こうした成立の経緯からも窺えるように、当初からミュージカルの範疇を超えた作品として書かれている。18世紀のフランスの啓蒙主義の思想家ヴォルテールの小説『カンディード』を翻案した荒唐無稽な物語に基づく作品で、ウェストファリアの青年キャンディードは、師バングロスから吹きこまれた「この世のものはすべて神の意志による最高のもの」という楽観主義思想のもとに、恋人クネゴンデを追って世界中を回る旅に出るが、そこで経験した様々な事件を通して楽観主義の誤りを悟る、という風刺的な内容が生き生きと

表現されている。作曲は1956年だが、後年に至るまで何度も改訂がなされている。

本日演奏される序曲は、短いながらもこの作品の幕開けにふさわしく湧き立つような輝かしさを持った名品で、勢いあるファンファーレに始まり、劇中の歌の旋律などを主題にしつつ、一気呵成に運ばれる。

サラサーテ：カルメン幻想曲 Op.25

パブロ・デ・サラサーテ(1844-1908)はスペインの生んだ大ヴァイオリニストで、その名技と甘美な音色によって一世を風靡した。多くの作曲家が彼のために作品を書き、また彼自身も自作自演用のヴァイオリン曲を多数作曲している。彼のヴァイオリン曲は母国スペインの音楽的特質をヴァイオリンの名技性に結び付けたものが多く、スペインのヴァイオリニストとしてのサラサーテの個性を端的に示すものとなっている。

ヴァイオリンと管弦楽のための『カルメン幻想曲』(正式の題は『オペラ「カルメン」のモチーフによる演奏会用幻想曲』)も彼の代表作。先に聴いたヴィエニャフスキの『ファウスト幻想曲』と同じような趣向のヴィルトゥオーゾ作品で、フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼーのオペラ『カルメン』の中のいくつかの旋律主題をもとに、オペラの持つスペイン的情緒とヴァイオリンの超絶的な名技性を結び付けている。

曲は序奏と4つの部分からなる。序奏は、原曲のオペラの第4幕への前奏曲“アラゴネーズ”に基づいた部分で、強烈な管弦楽に続いて独奏が鮮やかな技巧を繰り出していく。第1部は、第1幕でカルメンが歌う有名な“ハバネラ”に基づく変奏。第2部は第1幕で喧嘩を起こしたカルメンが捕らえられた際に口ずさむ旋律を扱っている。第3部は、やはり第1幕でカルメンが歌う“セギディーリャ”をもとにヴァイオリンが様々な技巧を凝らしていく。最後の第4部は第2幕の初めに歌われる“ジブシーの歌”を主題にして華麗な名技が披露される。

J.シュトラウスII：美しく青きドナウ Op.314

シュトラウスII世の書いたウィンナ・ワルツの中でも最も有名な作品に挙げられるもので、毎年世界中に生中継されるウィーン・フィル恒例のニュー・イヤール・コンサートでの定番のアンコール曲となっていることは、改めて言うまでもないだろう。

この曲はもともとはウィーン男声合唱協会のための合唱用のワルツとして書かれた。作曲は1866年から翌年初めにかけてなされ、プロイセンに敗れたオーストリアの国民を鼓舞するための作品という意図があったようだ。ただし作曲時はドナウ川にまつわる題はなく、曲題は初演前に付けられたという。1867年2月15日ウィーンで行われた初演の際の評判は必ずしも高いものとはいえなかったが、シュトラウスはその後これを管弦楽曲として書き直し、同年開催されたパリ万博やそれに続くロンドンでの演奏で大成功を収めたことでウィーンでもこの曲の人气が急速に高まり、やがて新たな歌詞も付けられてオーストリアの第2国歌ともいわれるようになった。幽玄ともいえる序奏で始まり、5つの変化に満ちたワルツと長いコーダが続く。